

石井武

2021年8月25日

# Art in Residence、 大石田。

大石田アートインレジデンスに関するレポート。

はじめに

新型コロナウイルス感染拡大防止対策に伴い、今回大石田に訪問できなかったことを深く詫びいたします。そして、この状況下でのリモート・レジデンスの実現にご協力いただいた山形の皆様、関係者の皆様に深く感謝いたします。ありがとうございました。

今回のレジデンスを通じて知り得たことは、自身の活動の今後の糧となる様な、大変充実したものになりました。

私たちが今回のレジデンスで一貫して行ったことは「交流」。大石田に住む方々との「交流」を通して、大石田をより深く知

り、感じることを意識しました。特に私がリサーチのテーマとしていた「伝統と現代」という視点から大石田を理解するには、大石田の住人の皆様と「生きた交流」を持つことが不可欠でした。

## 「伝統と現代」

私たちのリサーチは「大石田の歴史を知る」ことから始まりました。「大石田の今」を知るためにはまず、「大石田のルーツ」を知る必要があると考えたからです。

「伝統」として受け継がれている文化を知る住民の方々、そしてそれらを「受け継いでいる」方々のお話は非常に重要です。

お寺のご住職、ボランティア・ガイド、郷土資料館の職員の方々、役場職員の方々など、世代年齢を問わず様々な視点をお持ちの方々に大石田についてのインタビューを繰り返し行うことで見えてきたものは、「誇り」です。

大石田が共通して持っているその「誇り」とは、「最上川」でした。

「山形県内で唯一、川が町内を横断する」大石田の最上川。太古の時代から豊かな土壌を培い作物を育み、そして船の交易で「生活の基盤」となった最上川。川に生かされ、川とともに受け継がれた「伝統文化」や「技術」

時には洪水などの「天災」「自然の脅威」としての一面を見せる川と「戦う日々」も町の発展に繋がってきた、と

インタビューで伺いました。船大工や左官の技術も川と共に発展、継承されてきたそうです。現代の大石田に生きる方々も、毎日川の様子に気をやり、「川のある景色」のなかで暮らしている。

今も昔も「生活の一部」として住民の心に息付いている「誇り、最上川」

インタビューを行った全ての方々の言葉の中に「最上川に対する思い」を感じることができたのは貴重な体験であり、「誇り=宝」の様で、東京に生まれた私には得難いものだな、と羨ましくも思いました。

「大石田という町」

先述した様に「川が横断する」珍しい型の町、大石田。古い町の絵図を見ても、昔から「川を中心とした町」という型を意識して発展してきたのには非常に興味を惹かれます。

と同時に、お寺や神社が多い事にも気が付き、大石田に根付く「信仰」という視点からもリサーチをしてみたところ、興味深いお話をたくさん伺うことができました。

地元の方に伺ったお話では、昔は「神仏習合」の形をとることが珍しくなく、現在もその名残は残っているそうです。川近くの「住吉神社」をはじめ、大石田の付近には多くの寺社仏閣が大切に受け継がれていました。

さらに当時のお寺は「町民役場」などの機関としても機能していたという。ここにも「船商人の町」としての「合理性」、  
「川と共に生きる逞しさ」の様なものを感じました。

「向川寺の七不思議」や「涅槃像の伝説」など大石田に残る不思議な伝説も数多くある中、特に「大石田町名の由来」にまつわる諸説が印象的です。文字通り「大きな石が田んぼに在った」という説が有力とされていると伺いましたが、その他伺った諸説の中のひとつ、

「縄文時代頃には巨石信仰の様なものがあり、その名残りが長命になったのではないか？」という説には驚きました。さらに、「大石田付近には遺跡なども残っているらしい」と伺いました。出羽三山に代表される霊場、修験の地、山形。さらに交易も盛んで様々な文化や伝承が流れ伝わる「交差点」でもあった大石田。

大石田にはまだまだ不思議な伝承が残っているのかもしれない。残念ながらリモートで遺跡などのリサーチは叶いませんでしたが、私が大石田に訪問する際には改めてお話を伺いたいものです。

### 「舞踊と大石田」

私が舞踊家として活動するにあたり、「”日本の土着的な文化”を自ら取材し、それらを基盤に現代芸術を創作していく」という活動をしていることもあり、

「大石田の伝統芸能」には非常に興味がありました。コロナによるリモートワークのため「直接現地で触れ合う交流」は叶いませんでしたが、「維新祭」がそんな私を大いに勇気付けてくれました。

「維新祭」で披露された催し物は、大石田に関わるアーティストさんたちのそれぞれの創意工夫が施されていてどれも楽しく鑑賞させていただきました。実際に客席にいることはできなくても、リモートワークで少しでも「距離を感じずに」交流できたことは今回のレジデンスの特徴的な長所でした。中でも、大石田に伝わる「花笠」を現代的にアレンジされていた演目は、まさに「伝承と現代」を表した様なアートの形だと、感銘を受けました。

さらに維新祭の開催前には、有志の方々と事前リモートワークショップと題して交流の場を設けていただけたこともあり、山形と東京の「遠い距離」を感じることなくレジデンスを進めることができ、コロナ下で少し落ち込んでいた私は大変勇気付けられました。大石田には「花笠」の他にも、「大黒舞」や「田植踊り」「御神楽」など、今回触れ合うことができなかつた伝統芸能もまだまだあると伺ったので、私が訪問する際にはきっと「直接触れ合う交流」も実現させたく思っています。

### 「茂吉が愛した大石田」

大石田に感じた「町の誇り、最上川」と並んで「誇り」として町に根付いているのが「斎藤茂吉」の存在でした。

「白き山」で歌われた美しい風景を、私は東京から見る事になるのですが、パソコンの画面上にもかかわらずその「雄大な景色」に驚かされるばかりでした。

広い空、立ち昇る夏の雲、蒼く美しい山に囲まれた田んぼは輝き、川にかかる虹の幻想的な景色に言葉を失う瞬間が幾度もありました。斉藤茂吉の歌う「白き山」や、小松均が描く「雪の大石田」とはまた違う、「緑景の大石田」は本当に美しい。この景色も「守られ、受け継がれてきた誇り」なのです。この景色を見て作品のインスピレーションを得た「松尾芭蕉」や「正岡子規」ら先人達の足跡が町の至る所にある事にも納得しました。創作せずにはいられなかったのでしょうか。「手付かずの自然」では残せない特別な風景が大石田にはありました。

今回のレジデンスでの「交流」は非常に有意義なものであり、リモートワークでありながら、「交流」を「実感」できるものとなりました。

「伝統と現代」をつなぐ町・大石田に私が訪問する際には、今回のレジデンスを生かして大石田を「体感」していきたいと思っています。

山も川も、人も伝統も、お蕎麦もぺそら漬も、、、

改めて、出会う日が待ち遠しい。このレジデンスでの経験を、私は舞踊家として今後の活動に繋げていきます。関係者の皆様、ご協力いただいた全ての方々、本当にありがとうございました。

舞踊家 石井武

